

荒木見悟先生の思い出

野口, 善敬
花園大学

<https://doi.org/10.15017/1912763>

出版情報：中国哲学論集. 43, pp.80-99, 2017-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

荒木見悟先生の思い出

野 口 善 敬

荒木先生に関する思い出といえば、真面目で酒も飲まず、タバコも吸わず、学問研究一筋に生涯を捧げた大学者という姿を、誰しも思い浮かべることであろう。「本来性」と「現実性」を基軸としたその研究が、一時代を画し、思想史の視座として現在でも役立つことは言うまでもない。また、資料調査には必ず奥様の良子様が御一緒され、先生の横に坐って資料を書き取っておられたことや、その奥様が先生の論文の浄書をされていたことなども誰もが知っていることである。私が存じ上げている荒木先生の姿も同様であり、大きく異なる像を描くことは恐らくできない。

私は門下生の一人ではあるが、文字通りの不肖の弟子である。大した研究成果も出していない私に、先生について語る資格はないであろうが、せめて私自身と関わる思い出をいくつか並べて、報恩の一端としたい。

講義の試験問題

この原稿を書くに当たって、かつて荒木先生から頂戴した手紙やハガキなどの資料を入れた封筒を取り出し、久しぶりに開いてみた。

左にある手書き原稿の写真は、その資料の中の一つで、昭和五十六年二月十七日（火）、荒木先生が退官される直前、九州大学で最後に行われた大学院講義の試験問題である。

中国哲学史特講試験問題

一、張九成と大慧を包む心学思想について記せ

二、道統論の意味とその限界について記せ

三、次の詩を評釈せよ

昨日陰雲滿太空 眼前不見祝融峰 晚來風卷柳無迹

突兀還為紫翠重

一見してスケールが大きな設問で、どれだけ時間あっても答え切れる内容ではない。筆跡は先生ご本人のものではなく、奥様のものである。

試験時間は午前十一時半から午後一時半まで、二時間であった。その時どんな答えを書いたかは覚えていないが、いかにも荒木先生らしい出題である。張九成と大慧宗杲に関する第一問は、もしかしたら私向きに作成されたものかも知れない。第三問は、南宋の儒者である張栻（南軒・一一三三〜一一八〇）の詩である。試験を受けた当時、私はその典拠が分からなかったが、今回パソコンを用いてデータベースの検索を行い、『南軒集』巻五の「晚晴」という題目の七絶であることが分かった。当時はパソコンも存在せず、手作業での出典探しであった。少なくとも出典検索については、科学技術の発達に伴い、当時と今とでは天地の差ほど、便利さに開きがあることを痛感した。もちろん、だからといって荒木先生のように思索が深まるかどうかは別問題であるが……。

講義と演習

私が中国哲学史の研究室に進学した当時、中哲の学部生は、講義にしろ演習にしろ、学部の授業だけ受講すれば良いわけではなかった。先輩から、「大学院の授業も全部受けるのが当たり前だ」と言われて吃驚した。その授業も一コマの時間が長く、今の大学は九十分授業だが、当時は百十分であった。多くの先生方は授業時間の前後をかなり削って短くしておられたが、荒木先生の授業は、ほぼ時間通りで、少しでも早く終わる時には、「まだ時間があります」と申し訳なさそうにしておられた。

学部生の時には、儒教の用語などもチンプンカンプンであったし、大学の演習など、異国の言葉聞いていていようで、ただただ眠かった。いや実際にしばしば居眠りをしてしまい、授業が終わった後、先輩方から「君、寝てただろう」と注意をされたこともある。

学部で最初に担当した演習のテキストは『二程全書』だったが、「釈氏」を「お釈迦様」と訳して、先輩に笑われた思い出がある。もちろん荒木先生は表情を変えられることはなかった（だろうと信じている）。

荒木先生の授業以外にも、助教であった町田三郎先生の『十三経注疏』『韓非子集釈』などの演習はもとより、福田殖先生の『莊子集解』、長節子先生の『李朝実録』など、とにかく漢文漬けの毎日だったが、やはり一番大変だったのは荒木先生の演習の予習だった。

宋明学の漢文を読む際に最も手間がかかるのは出典探しである。今と違ってパソコンによるデータベースの検索システムも存在しない時代、研究室に夜まで残って、『大漢和辞典』はもとより、『四書索引』や『五経索



引」などを引きまくって、手がかりを探した。だが、たとえ典拠が分かって、ほとんどの文章の意味は分からず、先輩方に教示を請うことが多かった。学部進学当時に助手をしてもらった竹内弘行先生は、毎日、研究室に残って夜遅くまで仕事をしてもらったが、分からない箇所を質問に行くと、「教えられるのは辞書や索引の調べ方だけだから、あとは自分で考えなさい」と言っておられた。その通りなのであろう。

荒木先生の演習は、各回に発表者は一人だけで、漢籍で四丁分くらいの分量を担当した。担当箇所の漢文の書き下し文を読み、口語訳をし、出典などの説明をし終わると、荒木先生が御自分で読み直しをされるが、特に間違いを指摘されるわけではなく、正しい読み方と口語訳を示されるだけであった。もともとは時折、「ここはどういう意味ですか」とか、「ここはどう読まれましたか」とか尋ねられた。予想外の質問もあり、発表の段階で、担当した私自身は何も典拠を示していないのに、「ここは『孟子』の何篇だったですかね」などと聞かれ、「えっ、出典があるの」と思うこともあった。別段、怒られるわけではないし、語気を荒げられることもなかったが、演習が終わった後、先輩から、「荒木先生は本当は怒っておられるんだ」と言われ、より恐ろしい思いをした。

演習などと平行して、荒木先生の指示で、和刻本の『仏祖統紀』を借り出し、その返り点を白文に付けて読む作業を個人的にやっていた。そのような作業が漢文を読めるようになるのに有効かどうかは分からないが、『仏祖統紀』を部分的にしろ読むことができたことは後に役立った。人生に無駄なことはないのであろう。

「答辞」の手直し

学部を卒業する直前の昭和五十二年の春先、荒木先生から呼び出された。「君が卒業式で答辞を読むことになったから」とのお言葉であった。別段、成績が全学トップであったとか、そういう立派な背景があったわけではなく、単に九大の卒業式の答辞は学部の持ち回りで、更に文学部内の学科の持ち回りとなっており、たまたま中哲がその順番に当たったというだけのことであった。だが、「名誉なことだから」と先生から言われ、原稿を書いて先生に出すように言われた。事務から前年の原稿を見せて貰ったものの、まだパソコンもない時代で、ネットで文例を探すことも

できず、苦心惨憺して手書きで文章を書き提出したが、すぐに手を入れた原稿が返ってきた。真つ赤と言うより新たに書き下ろされたように変容していた。例えば書き出しの最初の段落は、もともと次の上段の様に書いていたが、下段のような原稿が添えられていた。

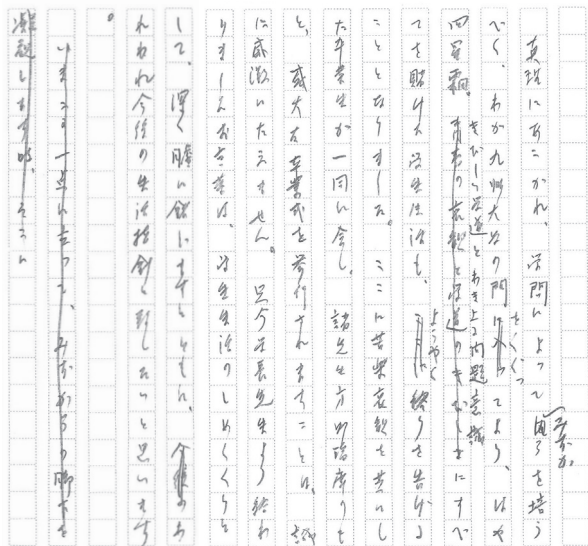
光陰矢の如く、四箇年にわたる大学生生活も瞬時の間に過ぎ去り、我々も早や卒業を迎えることとなりました。これも皆、直接間接に御世話になった方々の御蔭と感謝致しております。又、只今は学長先生より有意義なお言葉を頂き、我々一同、身の引き締まる思いが致しております。

先生の原稿を活字に起こせば、次の様になる。

真理にあこがれ、学問によってみずからを培うべく、わ

が九州大学の門をくぐつてより、はや四星霜。きびしい学道とわき上がる問題意識にすべてを賭けた学生生活も、ようやく終わりを告げることとなりました。ここに苦楽哀歓を共にした卒業生が一同に会し、諸先生方御臨席のもと、盛大な卒業式を挙行されますことは、誠に感激にたえません。只今学長先生より賜りましたお言葉は、学生生活のしめくくりとして、深く臆に銘じますとともに、われわれ今後の生活指針と致したいと思います。

第二段落以降は、ある程度原形を留めていたが、ご想像にお任せする。私の文章に比べれば、さすがに見事なものであったので、そのまま書き直し、卒業式で拝読させて頂いた。どう見ても聞いても全く私の文章ではないが……。



壇上で答辞末尾の「昭和五十一年度九州大学学士総代 野口善敬」と読んだ後で、「荒木見悟代作」と呟いたが、誰にも聞こえなかったであろう。式後、友人から「大学院の答辞より君の方が立派だったよ」と言われたが、私の手柄ではないし、「それはそうだろう」と思った。

私が受けた指導

答辞に限らず、論文でも文章の手直しを受けたが、もちろん答辞ほど極端ではなく、細かな言い回しや、資料の追加指示が主であった。

大学院の頃、東洋史におられた川勝賢亮先生から、「荒木先生は学生のことを良く見て把握しておられる」と言われたことがある。自分の学問研究に没頭して回りを見ていないような雰囲気だが、決してそうではないと言うのである。実際、学部・大学院を通して、私がサボり気味になると荒木先生は何か本を持ってきて無理やり貸してくれた。まるでお釈迦様の掌の上を飛んでいる孫悟空のような気分であった。

私が先生から初めて直接指導を受けたのは学部の時である。学部三年生の秋、卒論で大慧宗杲を扱うことを決め、荒木先生にお伝えした。すぐに御自分が使われていた校訂蔵経本の『大慧普説』を貸して頂き、また福岡教育大学にある和刻本の『大慧語録』などをご自分で、「ついでがあったから」と借りてきてコピーさせて頂いた。先生の本には、赤鉛筆での傍線や書き込みがあり、非常に参考になった。冬休みに自分の部屋にこもって大慧関係の資料を読み、資料カードを作成した。そして、四年生の春に自分なりに大慧禅の特質をまとめた原稿用紙三十五枚のレポートを書いて荒木先生に提出した。これが私の最初の論文らしきものである。すぐに返ってきたレポートには、次の様な紙片が付されていた。

1. 余りに整へておこし感じ、もろくも野性味があるよよん思ふ
 2. 大意の作「園語史勸の「んま」を一意味とし、その大意への
 の影響を調べよ
 3. その他、「五祖法演禪師評伝」「聖臥経論」あり
 を参考しよ

今から見れば恥ずかしい内容の原稿で、見る価値は全くなかったであろう。資料の幅を広げるようにという指示は当然のことだが、それよりも、ただ纏めれば良いのではなく、自分なりの独自の視座を作れという意味だろうと思つた。

その後、大学院、助手時代を経て、元代から明清代へと研究対象を広げたが、当然のことではあるが必ず指導教官であった荒木先生に下書きが終わった段階で見せて頂いていた。荒木先生が退官されてからは、先生が自宅におられる時に、直接、ご自宅にお伺いして原稿を見て貰うか、前もって郵送して後日、受け取りに行った。

先生のお宅に伺って原稿をお渡しすると、バラバラと捲りながら凄くスピードで目を通される。そして、質問をされたり、鉛筆で訂正を書き込んだりし、時折、立ち上がって書籍や資料の入った封筒を持ってきて、「こんな資料もありますよ」と教えてくれた。多くの場合、論旨の補強になる資料であったが、中には教示していただいた資料を差し込むと、論文の展開にそぐわず、話がややこしくなるので困ったこともある。考えようによっては、資料一つで話が崩れるような論文はダメだと、論旨の脆弱さを指摘されたのかも知れない。

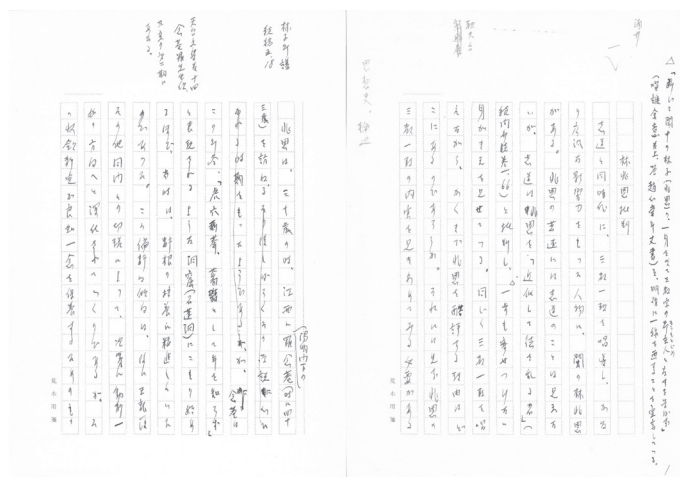
休学

荒木先生が九州大学を退官される二年前の昭和五十四年春、博士後期課程に進学した私は、大学院を休学して久留米市にある梅林専門道場に一年間掛捨することになった。その報告に先生の部屋に伺った。

荒木先生は、大学のご自分の部屋には研究のための資料や本を一置かず、仕事は専らご自宅ですておられたので、授業や教授会がある時以外、あまり大学には来ておられなかった。

授業の前だったか、後だったかは忘れたが、二階にある先生の部屋を訪ね、休学することをお伝えした。先生は、「そうですか。せっかくだからしっかり頑張ってください」と真面目な顔をして言われた。学問の裏付けとして修行も重要だと考えておられることが痛切に感じられ、住職の資格を得るために最低限の修行期間を消化しようと思っていた私にとっては耳が痛かった。先生の部屋を出た後、当時、助教授を勤めておられた町田三郎先生のところにも、同じように休学を伝えに行ったが、町田先生は、「君も親孝行だね」という言葉を返されただけだった。ある意味、普通の反応なのかもしれないが、私の本音を見透かされた思いだった。

私が休学していたその間、荒木先生は八月に『仏教と陽明学』（レグルス文庫、第三文明社）を、十月には『明末宗教思想研究―管東溟の生涯とその思想』（創文社）を刊行されるなど、陸続と大きな研究成果を出し続けておられた。（下の写真は『明末宗教思想研究』「八、東溟と



林兆恩」の草稿。)

私にとつて梅林寺における一年間の修行は色々な意味で得るものがあつたし、今日の私があるのは、そのお蔭であることは間違いない。その意味で後悔もなし深く感謝しているが、修行道場にいたこの一年間は、荒木先生が九大でされる講義・演習を受けることのできる残り二年の半分に当たっており、その機会を逸したことは、今になつても少し残念に思われる。

だが、それ以上に残念に思うのは、梅林僧堂から戻り復学して先生にお目にかかった時、「修行はどうでしたか」と聞かれた時、お答えできるような大悟と呼べるような修行の成果がなかつたことであろう。

絵ハガキ

手元にある先生からのハガキの中で、一枚だけ絵ハガキがある。消印が半分しか見えないので正確な時期は分からないが、前後に重ねられていたハガキの消印から推測して、平成初年のものかと思われる。

暑中お見舞い申し上げます。先日は何かとお骨折頂きました。益々御発展を祈ります。此の絵ハガキは、名古屋で催された禅宗展で求めたものです。白隠をたくさん集めてありますが、入場者も多く、どういう心理だろうか、椅子に坐つて考え込んだことです。仮りに大慧の墨跡をこれだけ集めたら、どんな感動をさそうであらうかと――。

今年も奇しくも白隠慧鶴禅師の二百五十年遠諱の年に当たっている。近年、芳澤勝弘先生の研究などを通じて白隠禅への理解も進み、各地で展覧会が開催



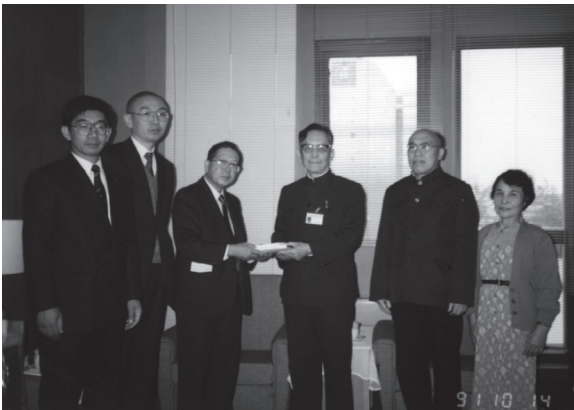
されて国の内外を問わず知名度も上がっている。僧侶として宗門に籍を置く私にとって、日本臨濟禪中興の祖と目される白隱禪師と、看話禪の完成者であり中国思想史上、絶大な影響を与えた大慧宗杲とを比較することは簡単にはできない。だから、先生のこのハガキを読み直してドキッとした。年月の推移と白隱評価の進展を別にしても、私には永久に口にできない研究者としての言葉だったからである。

北京図書館での資料調査

平成三年（一九九二）十月、荒木先生ご夫妻と共に資料調査のため北京図書館（現在の国家図書館）を訪問した。私の主目的は陳垣著『清初僧諍記』に引用された未見書籍を見るためであった。当時は同図書館に所蔵された善本は閲覧が困難であり、この頃、中国人民大学に留学しておられた難波征男先生のお骨折りで、人民大学の張立文教授の紹介を得て入館し、館長であった任継愈先生ともお目にかかることができた。もちろん私は単なる随行員であった。（下の写真は北京図書館の館長室で撮影。右から荒木良子、張立文、任継愈、荒木見悟、野口善敬、難波征男）

先生は、善本室に案内されると、普段の資料調査同様、寸暇を惜しんで、出された書籍やマイクロフィルムを凄い勢いでめくって読まれ、目にとまった箇所があれば、鉛筆で隣に奥様共々書き写しておられた。

手元の資料の中に、荒木先生直筆の「北京図書館往訪記（下書き）」と題された原稿がある（下付の写真は書き出しの二枚）。二百字詰め原稿用紙十二枚ほどの短文であり、どこかの雑誌等に掲載されたものかと思うが、私があればこれ書くより、それを一読頂ければ、当時の様子が良く分かる。その



原稿の末尾に、

「結局、われわれが眼を通すことができたのは、八部の書籍に終わったが、折角持ち帰った資料をどのように生かすかという宿題が残されたわけである。恐らく今一度彼女たちに会わねばならぬ日が訪れるであらう。」

とある。

彼女たちとは、北京図書館の閲覧室の女子職員のことである。事前に閲覧申請していた二十五部のうち、八部しか見ることができなかったことが悔やまれたのであらう。結局、当時七十四歳だった先生はこの後、北京図書館を再訪する機会に恵まれなかった。

私自身も後ろ髪を引かれる思いで図書館を後にしたが、中国社会科学院の陳智超先生（陳垣氏のお孫さん）との交流を通して、何種類かの善本の複写を入手することができた。今では、北京図書館の善本の一部はネット上で公開されており、より容易に見ることができるようになっている。今の研究者は感謝すべきであらう。

結び

荒木先生のお宅に何う時には、年始の挨拶は別にして、必ず何か研究に関わる用事がなければならなかった。先生の頃は先生と会って話をするのが恐ろしいこともあり、論文の原稿を見て貰う時以外にわざわざ何うこともなかった。先生の古稀のお祝いをしようとした時には、「そんな暇があるなら、自分の勉強をしなさい」と言われたし、叙勲された時には、わざわざ私に電話をかけてきて、「何もしないように」と釘を打たれた。私が、ある程度年を取っ



てからは、所用で近くに行った時などに、アポをとらずにお訪ねするようになり、奥様共々優しく迎え、接していただいた。本当にありがたいことであった。

ただ、いつも一貫して学問に関する話以外はほとんどされなかったし、学者や学界の話をする時にも、私が他の先生方の批判をすると、話題を変えられていた。修行を積んで自讃毀他戒を守っている禅門の老師方に似た風情を具えられていたように思う。

また、論文の本文中で、他者の意見を拳名で批判することを好まれず、正しい事実内容を示すことが最も大切で、他人の論文の間違ひは、せいぜい注記で触れるよう注意されたこともある。

『論語』憲問篇にある有名な「古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす」の語を、楠本正継先生門下同門の岡田武彦先生とは違った意味で彷彿とさせる存在であった。

白隠禅師は五百年間出の存在とされるが、荒木先生もそうなるのかも知れない。門下生の一人として努力不足を恥じるばかりである。

(二〇二七・九・一九)

荒木見悟先生年譜

- 一九一七年(大正六年) 五月二十一日 出生(本籍地…広島県佐伯郡廿日市町三〇〇号)
- 一九三〇年(昭和五年) 三月 廿日市尋常高等小学尋常科卒業 四月 広島県立広島第一中学校入学
- 一九三五年(昭和十年) 三月 広島第一中学卒業
- 一九三六年(昭和十一年) 龍谷大学専門部入学
- 一九三九年(昭和十四年) 三月 龍谷大学専門部卒業
- 一九四〇年(昭和十五年) 四月 九州帝国大学法文学部入学

二〇〇九年（平成二十一年）十一月 西日本文化賞を受賞
二〇一七年（平成二十九年）三月二十二日 逝去 享年九十九歳 叙正四位

著作・編著及び論文目録

一・著作及び編著

亀井南冥と役藍泉（徳山市立図書館叢書 第十集）

仏教と儒教―中国思想を形成するもの―

大慧書（『禪の語録』第十七卷）

竹窓隨筆（中国古典新書）

貝原益軒・室鳩巢（日本思想大系）（井上忠氏と共著）

明代思想研究

朱子・王陽明（世界の名著）（溝口雄三氏と共著）

大応（『日本の禪語録』第三卷）

亀井南冥・昭陽全集（全八卷）（井上忠氏等と共編）

仏教と陽明学（レゲルス文庫一一六）

明末宗教思想研究―管東溟の生涯とその思想―

楠本端山・碩水全集（全一卷）（岡田武彦氏と共編）

輔教編（『禪の語録』第十四卷）

大応国師語録（『禪の古典』一一）

徳山市立図書館 一九六三年一月

平楽寺書店 一九六三年四月

筑摩書房 一九六九年五月

明徳出版社 一九六九年十月

岩波書店 一九七〇年十一月

創文社 一九七二年十二月

中央公論社 一九七四年六月

講談社 一九七八年五月

葦書房 一九七八年四月～一九八〇年十月

第三文明社 一九七九年八月

創文社 一九七九年十月

葦書房 一九八〇年八月

筑摩書房 一九八一年五月（新装版：二〇一六年四月）

講談社 一九八二年十二月

吉村秋陽・東沢瀉（『叢書 日本の思想家』四十六）（荒木龍太郎氏と共著）

陽明学の開展と仏教

雲棲株宏の研究

呻吟語（中国の古典）

楞嚴経（仏教経典選十四・中国撰述経典二）

亀井南冥・亀井昭陽（『叢書 日本の思想家』二十七）

中国思想史の諸相

李二曲（シリーズ陽明学）

呻吟語（講談社学術文庫）

陽明学の位相

明清思想論考

新版 仏教と儒教

中国心学の鼓動と仏教

容肇祖著 新版明代思想史（秋吉久紀夫氏と共訳）

草場船山日記

島田藍泉伝

憂国烈火禅―禅僧覚浪道盛のたたかい―

珊瑚林―中国文人の禅問答集―

竹窓随筆―明末仏教の風景―

陽明学と仏教心学

明德出版社 一九八二年六月

研文出版 一九八四年七月

大蔵出版 一九八五年七月

講談社 一九八六年五月

筑摩書房 一九八六年七月

明德出版社 一九八八年十月

中国書店 一九八九年一月

明德出版社 一九八九年九月

講談社 一九九一年三月

研文出版 一九九二年三月

研文出版 一九九二年一月

研文出版 一九九三年十一月

中国書店 一九九五年十月

北九州中国書店 一九九六年六月

文献出版 一九九七年十月

ぺりかん社 二〇〇〇年二月

研文出版 二〇〇〇年七月

ぺりかん社 二〇〇一年三月

中国書店 二〇〇七年六月

研文出版 二〇〇八年九月

二. 論文

朱子の実践論

本来性と現実性―中庸と華嚴經による解明―

頓悟漸修論

李通玄の立場

朱子格物論の周辺

機根の問題

陳北溪と楊慈湖

亀井南冥研究(その一)

亀井南冥研究(その二)

宗密の絶対知論―知之二字叢妙之門について

知行合一論の一検討

陽明学と禅学

陳白沙と太虚法師

管東溟―明末における一儒仏調和論者の思惟構造―

真心をめぐる儒仏の対立―宋明思想研究覚書―

明末の禅僧湛然円澄について

禅僧玉芝法聚と陽明学派

明儒張陽和論―良知現成論の一屈折―

思想家としての宋濂

『日本中国学会報』第一集 一九四九年十月

『日本中国学会報』第二集 一九五〇年十月

『福岡学芸大学紀要』第一号 一九五二年三月

『福岡学芸大学紀要』第二号 一九五三年二月

『日本中国学会報』第六集 一九五四年十月

『福岡学芸大学紀要』第六号 一九五四年十二月

『哲学』第六輯 一九五六年三月

『福岡学芸大学紀要』第八号 一九五六年十二月

『九州儒学思想研究』 一九五七年三月

『南都仏教』第三号 一九五七年五月

『支那学研究』第十八号 一九五七年十月

『斯文』第二十号 一九五八年二月

『福岡学芸大学紀要』第九号 一九五九年十二月

『日本中国学会報』第十二集 一九六〇年十月

『九州中国学会報』第七卷 一九六一年六月

『支那学研究』第二十八号 一九六二年十二月

『九州中国学会報』第十卷 一九六四年五月

『哲学年報』第二十五輯 一九六四年十月

『目加田誠博士「還暦記念論集」 一九六四年十一月

羅近溪の思想
 丘瓊山の思想
 明末における儒仏調和論の性格
 周海門の思想
 玉龍溪の中鑑録について
 中国中世の思想（六朝隋唐仏教思想史）
 智旭の思想と陽明学―ある仏教心学者の歩んだ道―
 士大夫と禪
 湛甘泉と王陽明―なぜ甘泉学は陽明学ほど発展しなかったか―
 禪者への提言―中国思想史家の立場から―
 宋代の儒教と仏教
 四書湖南講について
 心学と理学
 齊物論釈訓註（その一）
 齊物論釈訓註（その二）
 陽明学と明代の仏教
 聶雙江の思想
 齊物論釈訓註（その三）
 謝上蔡語録解題
 濂洛風雅解題
 性善説と無善無惡説

『九大文学部四〇周年記念論文集』 一九六六年一月
 『九州中国学会報』第十二集 一九六六年五月
 『日本中国学会報』第十八集 一九六六年十月
 『哲学年報』第二十六輯 一九六七年三月
 『九州中国学会報』第十三卷 一九六七年五月
 『中国文化叢書第三卷』『思想史』（大修館書店） 一九六七年十月
 『中国文化叢書第六卷』『宗教』（大修館書店） 一九六七年十二月
 『仏教史学』第十三卷第三号 一九六七年十一月
 『宗教学年報』第二十七輯 一九六八年三月
 『禅文化』第四十九号 一九六八年六月
 『歴史教育』第十七卷第三号 一九六九年七月
 『哲学年報』第二十八輯 一九六九年八月
 『禅学研究』第五十八号 一九七〇年三月
 『哲学年報』第二十九輯 一九七〇年三月
 『哲学年報』第三〇輯 一九七一年三月
 『陽明学大系第一卷』『陽明学入門』（明德出版社） 一九七一年九月
 『日本中国学報』第二十三集 一九七一年十月
 『哲学年報』第三十一輯 一九七二年三月
 『近世漢籍叢刊』『謝上蔡語録』所収（中文出版社） 一九七二年五月
 『近世漢籍叢刊』『濂洛風雅』（中文出版社） 一九七二年五月
 『アジア文化』第九卷四号 一九七三年三月

羅近溪

歐陽南野

吳蘇原の思想—容肇祖論文の批判によせて—

陳白沙

羅念菴の思想

宋儒陳瓘について

Confucianism and Buddhism in the Late Ming

コロムビア大学 『The Unfolding of Neo-Confucianism』 一九七四年十二月

駁呂留良四書講義をめぐる若干の問題

陳龍正の思想—東林学の一繼承形態—

島田藍泉研究(その一)

覚浪道盛研究序説

屠隆と管志道

謝上蔡

王船山における理と気の問題

島田藍泉の「大道公論」について

張聖巖氏の批判に答える—「明末中国仏教の研究」の所論について—

明末の禅僧無念深有について

島田藍泉研究(その二)—島田藍泉小傳—

明末における二人の三教一致論者

唐伯元の心学否定論

陽明学大系第六卷『陽明門下』中(明德出版社) 一九七三年三月

陽明学大系第五卷『陽明門下』上(明德出版社) 一九七三年五月

『九州中国学会報』第十九卷 一九七三年六月

陽明学大系第四卷『陸象山』(明德出版社) 一九七三年十月

『哲学年報』第三十三輯 一九七四年三月

『宇野哲人先生白壽祝賀記念東洋学論叢』所収 一九七四年十月

『哲学年報』第三十四輯 一九七五年三月

『中国哲学論集』第一号 一九七五年十月

『哲学年報』第三十五輯 一九七六年三月

『集刊東洋学』第三十五号 一九七六年五月

『日本中国学会報』第二十八集 一九七六年十月

朱子学大系第三卷『朱子の先駆』下(明德出版社) 一九七六年十月

『中国哲学史の展望と摸索』 一九七六年十月

『国語の研究』第十号 一九七七年五月

『中国哲学論集』第三号 一九七七年十月

『禅文化研究所紀要』第九号 一九七七年十一月

『哲学年報』第三十七輯 一九七八年三月

『東洋学術研究』十七—一五 一九七八年九月

『中国哲学論集』第五号 一九七九年十月

張九成について

憨山徳清の思想

顔茂猷小論

楊龜山小論

林希逸の立場

生田正菴小傳

意は心の存する所——劉念台思想の背景——

〔書評〕 錢穆著『朱子新学案』

陳確の大学偽書説をめぐる

崎門学者鈴木貞斉について

潘殖の忘筌書について

指月録の成立

宋元時代の仏教、道教に関する研究回顧

禅と儒教との葛藤

道統論の衰退と新儒林傳の展開

明末仏教の性格

趙大洲の思想

明代における李通玄

中国仏教と親鸞——中国はなぜ親鸞を生み得なかったか——

郝楚望の立場

禅と名教——木陳道忞の変節——

『森三樹三郎博士頌壽記念東洋学論集』 一九七九年十二月

『池田末利博士古稀記念東洋学論集』 一九八〇年九月

『明代思想文芸論集』 一九八一年二月

『哲学年報』第四十輯 一九八一年三月

『中国哲学論集』第七号 一九八一年十月

『中国哲学論集』第八号 一九八二年十月

『中国における人間性の探究』 一九八三年二月

『東洋史研究』第四十一卷第四号 一九八三年三月

『九州中国学会報』第二十四卷 一九八三年六月

『日本中国学会報』第三十七集 一九八五年十月

『中国哲学論集』第十二号 一九八六年十月

『九州中国学会報』第二十六卷 一九八七年六月

『久留米大学比較文化研究所紀要』第一輯 一九八七年五月

『禅と哲学』 一九八八年八月

『久留米大学比較文化研究所紀要』第七輯 一九八九年十二月

『駒沢大学仏教学部論集』第二十一号 一九九〇年十月

『陽明学』第四号 一九九二年三月

『日本中国学会報』第四十五集 一九九三年十月

『龍谷大学仏教文化所紀要』第三十二集 一九九三年十二月

『中国哲学論集』第二十集 一九九四年十月

『東洋古典学研究』第一集 一九九六年五月

- 草場船山―その人と学問― 『佐賀藩多久領の周辺の諸問題』第十二集（特集・西南地域史研究）一九九七年十一月
 実学をめぐる朱子学の変転―熊本実学派への一視点 『東洋古典学研究』第五集 一九九八年五月
 （史料紹介）多久関係者の楠本碩水あて書簡
 『佐賀藩多久領の周辺の諸問題（続）』第十三集（特集・西南地域史研究）二〇〇一年二月
- 于孔兼をめぐる人びと 『東洋古典学研究』第十二集 二〇〇一年十月
 陶望齡と性命学 『東洋古典学研究』第十三集 二〇〇二年五月
 頓悟漸修論と『西遊記』―『西遊証道大奇書』の観点― 『臨濟宗妙心寺派教学研究紀要』第一集 二〇〇三年四月
 葛寅亮年譜考 『東洋古典学研究』第十六集 二〇〇三年十月
 仏教居士としての陸光祖 『名古屋大学中国哲学論集』第三集 二〇〇四年三月
 明末における永明延寿の影象 『東洋古典学研究』第十九集 二〇〇五年五月
 楊慈湖論 『東洋古典学研究』第二十二集 二〇〇六年十月